

佳作

## いつかきつとあの場所へ

群馬県 太田市立沢野小学校四年 富岡 慈織

ぼくはきよ年の五月に、サッカーの試験を受けました。夏休みに、イタリアのACミランの小・中学生の合宿に参加するための試験です。

当日、ぼくは三十九度の熱を出して、サッカーをするどころではなかったけれど、どうしても試験を受けたくて、薬を飲んで参加しました。試験は、ドリブルやパス、スペースの使い方などのきそ力と、試合での動きやはんだん力などをみているように長い時間がかかりました。

いよいよ発表の時です。ゆうしゅう選手に選ばれた人だけが、イタリアに行くことが出来ます。ぼくはと中から具合が悪くなってしまい、自分がしたいプレーがあまり出来なかったので、期待と不安でむねがつぶれそうでした。

「ゆうしゅう選手は、いおり。」

自分の名前がよばれたとき、言葉にはできないほど体中から喜びがわきあがってきました。今までうまく出来なくて、何度もサッカーをやめようと思ったこともあったけど、がんばってつづけてきてよかったと心のそこから思いました。

そして夏休み、ぼくは数人の仲間といっしょにイタリアへ行きました。初めての外国、初めて見るけしきにドキドキが止まりませんでした。何といても、サッカー大国の広いグラウンドでのサッカー練習や試合は、毎日楽しくてむ中になりました。つかれも、家族とはなれているさみしさも感じませんでした。

イタリア合宿の最終日に、ACミランの本きよ地であるサンシロスタジアムを見学しました。おどろくほど広いスタジアムを見わたしたとき、体のそこからブルブルと何かがわきあがってくるのが分かりました。だれもいないスタンドから、大きなかん声が聞こえてきました。ぼくもいつか、ACミランの選手としてここに立ち、大きなかん声の中、全力でプレーしたいと強く思いました。

サッカーでプロになれる人は、ほんのわずかです。その中でも海外でプレー出来る人は、ほとんどいま

せん。でも、あきらめたら終わってしまいます。あの試験のとき、具合が悪くてもあきらめなかった自分がとてもほこらしいです。これから先、サッカーでつらいことやいやなことが待っているかもしれない。せん。そんなときは、あのサンシーロスタジアムで感じた気持ちを思い出して、ゆめにむかって努力をつづけていこうと思います。あの大きなかん声をもう一度聞くために。